

## アルチンボルド《ウェルトゥムヌスとしてのルドルフ 2世》：神話の再解釈と仮装文化の関係

江村 哲朗 (東北大学)

---

ジュゼッペ・アルチンボルド (Giuseppe Arcimboldo, 1526-1593) による《ウェルトゥムヌスとしてのルドルフ 2世》(1590年)は、果実や野菜、花々を組み合わせることで人間の胸部像を形づくった絵画である。同時代の著述家グレゴリオ・コマニーニ以来、本作における四季の神としてのウェルトゥムヌスのイメージが、自然世界の支配者としての皇帝を賛美するために用いられていると解釈し、この画家の「四季」や「四大元素」連作と関連づけることで、本作は神聖ローマ皇帝ルドルフ 2世と古代の神ウェルトゥムヌスを結びつけた絵画として考えられてきた。(例：カウフマン、1993)

本発表では、画家がウェルトゥムヌスを絵画の主題とした目的を掘り下げて考察する。第一に、画家がウェルトゥムヌスの四季の神であると同時に多様な技芸的属性をもつ人間に変装することができたという伝承に特に注目した可能性、第二に、画家がルドルフ 2世の宮廷において関わっていた祝祭のための仮装文化との関連性を検討する。

オウィディウス『変身物語』(第14巻 623行~697行)においてウェルトゥムヌスは、身体を万物に変えることができるユピテルとは対比的に、多様な年代や性別や職業という人間的属性に仮装する神として強調されている。ウェルトゥムヌスは道具や装飾品を変え、麦の穂をかごで運ぶ粗野な百姓や竿を手に持った釣り師、はさみをもった植木職人や葡萄樹の刈り込み人となる。つまり人間が自然を操作するための様々な役割や属性を身に纏い、見る人に様々な姿を見せる神なのである。皇帝は世界中の奇妙で珍しい自然物を蒐集し、天文学者や錬金術師、数学者を庇護し、個人的な博物館をつくり世界の再創造を楽しむ程の教養を持ち合わせていた人物である。自然を掌握し、その支配下に置く皇帝とウェルトゥムヌスが仮装した「人」との間には自然を人間が支配するという共通点がある。

物体の組合せで錯覚的に人物像を見せるという綺想は、人に奇抜な姿をさせることで別の存在になりかわるという祝祭の仮装に類似しており、発想の源泉となっている可能性がある。例えば、ルドルフ 2世在位期間の1585年の馬上競技の祝祭において、この画家がデザインした衣裳案《コック》が挙げられる。瓶に穴を開け仮面の様に被りさらにバケツを帽子にして、腰にはコップとおたまを刺している。身体全身を料理の道具で装飾することでまさに「コック」に仮装しているのである。仮装という文化は宮廷において、その概念を可視化し、その発想の豊かさを認め楽しむためのもので

あった。すなわち仮装は実演する側も見る側も教養を必要とされる技芸であった。

このように、本作品におけるウェルトゥムヌスのイメージは、事物の組合せによる錯覚的遊戯、自然界の支配者としての皇帝賛美に加えて、多様な技芸的属性を身につけ、仮装を楽しむ文化で生きた皇帝を賛美するために利用されたのである。